

## 第二章 方言研究史

私は、方言研究の歴史を次の五期に分ける。

| 時期  | 時代     | 研究者  | 目的   | 代表作     |
|-----|--------|------|------|---------|
| 第一期 | 織田豊臣時代 | 外国人  | 通辯   | 日本文典    |
| 第二期 | 徳川時代   | 佛講師  | 不辯   | 片言、物類稱呼 |
| 第三期 | 明治三十五年 | 教育會  | 方言矯正 | 口語法調査書  |
| 第四期 | 昭和前期   | 土俗學者 | 土俗研究 | 蝸牛考     |
| 第五期 | 昭和後期   | 國語學者 | 國語研究 | 言語誌叢刊   |

方言の資料は早く萬葉集時代からあるが、研究の始まつたのは近世になってからである。その研究が先づ外國人によつて成され、國語學者は最後に登場したのは大きな皮肉である。

## 第一節 織田豊臣時代

西洋人の代表作としては、先づ「日本文典」(Arte da lingua de Japan)を挙げなければならぬ。これはポルトガルの布教師ロドリゲス(José Rodriguez)が慶長九年から十三年にかけて、長崎耶穌會學林から刊行したものである。口語法は、主として、當時の標準語たる京都辯によつて居るが、外にはゆる國辯談の記事が見え、特に下即ち九州に関する記述が詳しい。この本は、日本では未だ複製又は翻譯されて居ないが、方言に關する部分は、「民族」二卷一號に、橋本博士によつて譯され、又「國語科學講座」第五輯(第五回配本)には吉町義雄氏によつて譯されて居る。今日から見ると珍しいと思はれるものを、これから、「二三引いてみよう。肥前・肥後・筑後の女達は、感動詞のヨの代りにバヲを用ゐた。參ルバヲ、書イタバヲ、書カウバヲ等。博多には、バブン(過分)パンス(罐子)パンネン(觀念)パシ(菓子)シウバチ(正月)ケンバ(喧嘩)などいふ訛があつた。九州一般に、移動を示す「へ」の代りに、ノヤウニ、ノゴトクを用ゐた。都ノヤウニ上ル、關東ノ如ク下ルなど。上ガジ、讀マジ、習ハジといふ文語の未來打消の形が九州の一部に行はれて居た。

次に、耶穌會長崎學林刊行の「日葡辭書」(Vocabulário da lingua de Japan)は慶長八年に本篇が出、翌年に補遺が出て居る。これはポルトガルの宣教師と日本人との協力に成るもので、古今雅俗の單語約三萬を収めてある。その内、下(九州)の方言約三百語、上(畿内)の方言約百五十語、その

他の方言約三十語を數へる事が出来る。この方言は、近藤國臣氏が「方言」一の一、二の二、二の二、二の五、三の五に抄出してある。これを見ると、シモの方言といふのは、實はおもに長崎方言である事が判る。

一六三〇年マニラ版「日西辭書」(Torres Pinpin 著)や、一八六二年パリ版「日佛辭書」(Leon Pons 著)も、この「日葡辭書」を基にしたものであるといふ。古賀十二郎氏の「長崎方言集覽」(長崎市史・風俗編所収)には、レオン・パジェスの「日佛辭書」から引用した長崎方言があり、特に廢語には印を附けてあるから、これに依つて、現代方言との比較を見る事が出来る。

民撰本「華夷譯語」に收められた明の揚振の「日本館譯語」は、伊波普猷氏によつて「方言」二卷九號に複刻されて居る。語數は合計五百六十四語。これは九州人から採集したと見えて、九州方言が所々に混じつて居る。もつとも、形容詞の語尾は、イ語尾(タカイ、アツイ等)シ語尾(ナガシ、ミシカシ等)サ語尾(フカサ、アササ等)の三でカ語尾は無いから、答へ手は、出来るだけ、標準語(京都辯)を以て答へたと見える。答へ手に、方言と標準語との區別があれば、さうあるべき理である。しかし、偶然洩れた方言は、九州方言と認めてよいものである。その證據を次にあげる。

ノ(主格)。非那谷里答(晩) 非馬那阿祿(閑)、これらのノはガの意味である。標準語では「日の後では今日でも」「日の暮れた」式に使ふ。伊勢で「雨左降る」といひ、阿波祖谷地方で「足なだしい」(足がだるい)といふ、このナはノの訛だらう。たゞし、秋田縣の様に、上にンが來た場合に限つて、「本な在る」「運な悪い」などいふのは、單に音韻の問題である。佐賀・熊本には、この種のナもある。

チ(て)。開的(爲字) 稱的(貫)。カイテ、カウテの訛である。今、鹿兒島・日向・筑後・土佐幡多郡・南伊豫などにある。

申シ(助動詞) 足念毛世(到岸)、「着き申し」である。ロドリゲスの「日本文典」の「動詞に接續する敬讓の助辭に就いて」の章の「申し」の條に、

○阪東に於ては下々の間に、又下に於ては主として肥前・肥後・薩摩・日向の國で「まらする」の代りに盛に用ゐられる。然し甚だ低級な言葉遣である。例へば、上げ申す、讀み申さぬ、聞き申さうす。

とあるさうである。さて、この「日本館譯語」の方言は決して阪東方言でない事は、稿的(買ッて) 讀急納峻羅(好月亮) 約答(醉了) 等の關西系の語法によつて明である。だから、「着き申し」は、

ロドリゲースによつて、九州方言である。

ノ(目的格)。貼喇那密吾(看寺) 扎那哇嗑斜(燒茶) 撒念那約答(酒醉) 列那納酪(習禮)、是等のノは、ヲの代りに使はれて居る。今、ノ(群馬・日向・鹿兒島・壹岐)ノウ(種子ヶ島)ヌ(日向・鹿兒島)ヌウ(豊後)等といふが、何れも、シの下に來た場合に限られて居る。紀伊日高郡だけは、「ボールの蹴る」といふさうだから、唯一の例外である。昔は「茶の沸かせ」等と言つたとすれば、昔の方が用法が廣かつた。

ウノシ(汝)吾那世哇とあるが、これは今日の方言には見當らない。ウニシ(上總) ウヌシ(上總・相模・静岡・筑後・豊前・豊後・佐賀) オヌシ(相模・美濃・名古屋・備中・周防・阿波) オノシ(佐渡・美濃・尾張・紀伊・出雲・石見・山陽道) オンシ(甲斐・遠江・美濃・三河・周防・讃岐・土佐)ならある。「かたこと」には、オヌシとオノシと正訛兩形をあげてある。「日本館譯語」のウノシに一番近いのは、ウヌシであるが、これは西日本では九州に限られて居るから、ウノシも多分九州方言だらう。

イカワ(井)。九州八縣と安藝とにある。イガワといふのが普通である。

この「日本館譯語」の採集法は支那人が漢字を示して、それを日本人に日本語で讀ませたらしい痕跡がある。イカワ(井)の漢字は「井」で、これは漢字の直譯で、日本語に成つて居ない。答へ手が、實物に關する十分の知識を缺いて居た證據である。

明の侯繼高(萬曆頃の人)の「全浙兵制」の附録をなす「日本風土記」には、漢字と平假名とを以て、約千百六十語の日本語を収めてあるが、その中には、播草許多(善人) 阿密草(甜) 油那(魯)(船漏) ひのくるる(日入)等、九州方言が指摘される。

## 第二節 徳川時代

日本人の手に成つた最初の方言訛語集は安原貞室の「かたこと」(慶安三年刊行、「日本古典全集」四ノ七所収)である。貞室は松永貞徳の正統を繼いで、花の下第二世を稱した貞門俳諧師の巨頭である。初め正章と言つた。「これは」とばかり花の吉野山」の作者である。彼には元次といふ獨り子があつた。十四ばかりで早死したが、それが十歳ばかりの時、いと拙き片言のみ口にするのを父なる貞室が矯正しようとして、この一書を編んだと序文に記してある。動機は、いかにも、その通りだらう。しかし、途中から學問的興味が加はつて、一定の計畫の下に、蒐集と分類とをした様である。本書は五卷ある内、第三卷の半までは分類なく、それ以後は、時節・人倫・衣服など、分けて居る。

書き方にも、前半には教訓が多く、後半にはそれが少ない。前半は元次一人だけに見せようとし、後半に至って、心が變つて、版にして、廣く世間に弘めようと思したのだらう。さて、本書の内容は、京の訛語や卑語を記したもので、稀に、近江・丹波・豊後の方言もある。

貞享五年版の彈松著「浮世鏡」の第三の巻は「片言補遺」と題して、部類分けに京訛を集めて居る。「これ（貞室の「片言」を指す）にもらしたるをかき侍れば、更にひとつ事にあらず」と序文にあるけれども、實は、重複も多い。

元祿六年の刊行と考へられる苗村丈伯著「男重寶記」には「かた言なをし」といふ一章があるが、その内容は前二書から承けたもので、著者の獨創といふものは全く無いと謂つてよいとは、佐藤鶴吉氏の説である。たゞ、當時、訛言矯正が「片言直し」といふ名で呼ばれた事は注意してよい。

「かたこと」の抄出本で、しかも同一板木を用ゐて摺られた末書に、當世嘉多言愛世吳竹（貞享五年）まこと草（元祿五年）當世大和言葉（享保五年）正誤大和言葉（安永五年、及弘化三年）の五つが今までに知られて居る。

「世話類聚」の片言は、泉井久之助氏によつて、「方言」四卷十二號に複製されて居る。京都の地名や寺名の読み方が示してあるから、京都訛を集めたものである事が判る。「かたこと」と共通の言十五庚戌年仲冬中旬寫之とあり、その下に松月と署名してあるさうである。この松月は、貞享五年の「憂世吳竹」の編者藤氏松月と同一人であらうか。

全國方言集として最初のもものは、越谷吾山の「諸國方言物類稱呼」（安永四年刊）である。吾山は武藏越谷の人、江戸に出て俳諧の師となり、天明七年七十一歳で歿した。その墓や位牌は、近頃大田榮太郎氏等の努力によつて發見された。本書は、天・地・人・倫・艸・木・氣・形・器・用・衣・食・言・語の七門にわかち、之を五巻に集めて居る。關東の方言が最も多く、對照的に京阪語をあげて居る。今日廢語となつたものも多い。本書は「日本古典全集」四期七回配本に複製され、又、吉澤博士によつて、大阪屋本と須原屋本と校合し、索引を附けたものが單行本として出版されて居る。「和歌連俳諧國方言」（寛政十二年）は本書の改題であるといふ。

動植物方言を集めたものとしては、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」（文化三年第一版、文政十二年第二版、弘化元年増補第三版、弘化四年重訂第四版）が最も詳しい。例へば、石蒜は四十八、水龍は六十一の異名を擧げて居る。「物類稱呼」の方言も引用されて居る。この本は、近頃、日本古典全集刊行會や春陽堂から複製されて居る。

大阪辯を集めたものには、「浪花聞書」と「新撰大阪詞大全」とがある。前者は江戸者の著らしく、大阪詞と江戸詞とを對照してゐる。奥附は無いが、記事中に「今年文政二年の春」と見える。國語學上はもとより、國文學上からも有益なものである。「日本古典全集」第四期第七回に複刻されてゐる。「大阪詞大全」は著者不明、天保十五年の印行で、主に、卑語や隠語の類を集めてゐる。鈴鹿三七氏によつて、「典籍之研究」の第二輯・第三輯に複刻されて居る。

次に、江戸の俗語を集めたものとしては、村田了阿（安永元年——天保十四年）の編と云はれる「俚言集覽」がある。諸國の方言も少しはある。明治になつて出た井上氏等の「増補俚言集覽」には、方言資料は多くなつて居る。

三都以外の方言集は次に表にして示す。ただし、未刊のものは省く。

| 著者    | 書名      | 所  | 年代    | 刊本       |
|-------|---------|----|-------|----------|
| 服部武喬  | 御國通辭    | 盛岡 | 寛政十二年 | 南部叢書、第十卷 |
| 堀季雄   | 演萩      | 羽前 | 明和四年  | 言語誌叢刊    |
| 氏家剛太夫 | 莊内方言致   | 羽前 | 没年天保  | 言語誌叢刊    |
| 菊花堂   | 仙臺言葉以呂波 | 仙臺 | 享保五年  | 仙臺叢書、八卷  |

| 著者   | 書名       | 所   | 年代    | 刊本        |
|------|----------|-----|-------|-----------|
| 齋藤   | 方言通用抄    | 仙臺  | 文政十年  | 仙臺叢書、八卷   |
| 不    | 仙臺方言     | 同   | 不     | 同         |
| 燕々   | 俳諧夷艸     | 同   | 安永五年  | 國語研究、三ノ十二 |
| 匡    | 演萩       | 同   | 不     | 仙臺方言音韻考   |
| 小林一茶 | 方言雜集     | 信濃  | 没年文政  | 一茶叢書、二編   |
| 山本格安 | 尾張方言     | 尾張  | 寛延元年  | 尾張の方言、續篇  |
| 石井垂穂 | 水かはり     | 同   | 文政二年  | 同         |
| 柴田虎吉 | 宮訛言葉の掃溜  | 熱田  | 文政四年  | 方言叢書、六    |
| 不    | 丹波通辭     | 丹波  | 不     | 古典全集、四ノ七  |
| 坂本孟春 | 俚諺漫錄     | 備後  | 文政六年  | 方言叢書      |
| 布施諸鱸 | 他所問答     | 山口  | 不     | 長周叢書      |
| 不    | 都久志ことば   | 九州  | 明     | 方言、一ノ三    |
| 野崎教景 | はまおき     | 筑後  | 天保弘化頃 | 單行本       |
| 不    | 八丈島方言俗通誌 | 八丈島 | 不     | 明一話一言     |

## 第三節 明治時代

明治になつてから最初の二十年間は、琉球語は別として、内地方言に關する單行本は一冊も出なかつた。二十年に、和歌山縣の多屋梅園氏が「田邊方言」(昭和三年再版)を出して以來、ボツ／＼出る様になつた。當時、方言熱を煽るに與つて力あつたものは、坪井正五郎博士の主宰する「東京人類學會雜誌」(明治十九年創刊。後に「人類學雜誌」と改題し、今に及ぶ)であつた。日本最初の考古學雜誌、日本最初の土俗學雜誌、日本で最も長命の學術雜誌として令名ある本誌は、方言についても亦最初の開拓者としての名譽を擔ふものである。第一卷・第二卷にも方言の報告はあるが、特に、第四卷(明治二十二年)には殆ど毎號、方言の記事がある。當時、人類學と稱したのは、主として、今の考古學と土俗學、それに民族の異同といふ事が、ひどく問題にされた。報告者は主に、いはゆる人類學者であつて、國文學者の稀なのは、雜誌の性質上やむを得ないが、「言海」「大言海」の校正者として名ある大久保初男氏(大槻博士の姻戚)が、一人で千葉・金澤・越後・京都の方言を報告して居るのが人目を引く。「風俗畫報」(明治二十二年創刊)も早くから方言の投書をのせて居たが、明治二十九年以後は言語門を設けて、毎號方言の報告をのせた。この雜誌は珍しいほど長生し、また老若男を讀んだものである。といふのは、片カナレか讀めない八歳の正一に取つては、片カナ書きの方言を讀む外に仕方が無かつたからである(當時は幼年雜誌などいふ氣の利いたものは無かつた)。二十數年を経た今日、研究のため、古い「風俗畫報」を押入から引出して見ると、當時の、子供らしい落書を見附けて感慨にふける事がある。

明治三十年代になると、信濃の「北安曇郡方言取調」(同郡役所)を魁として、毎年、方言書が出版され、三十五年六月に至つて、最高潮に達した。この頃の方言集の特徴として、その編者が大部分教育會である。「東筑摩郡方言」(三十一年)「福岡縣内方言集」(三十二年)「栗原方言及手鞠歌」(同年)「石川縣方言彙集」(卅四年)「茨城縣稻敷郡方言集」(下水内郡方言調査書)「大分縣方言類聚」(佐賀縣方言辭典)(以上三十五年)「佐賀縣方言語典一斑」(河内郡方言集)「東濃方言集」(以上三十六年)「茨城方言集覽」(吉備郡方言訛語調査書)(以上三十七年)等、すべて、教育會、又は類似の團體である。個人の著もある事はあるが少ない。

個人の著と、教育會の著とを問はず、當時の方言集に共通する目的は方言矯正、標準語教育にあつた。これには當時の事情を考へ合わせる必要がある。當時は未だ文語萬能で、生きた國語は、小説・脚

本の會話の文くらゐにしか使はれて居なかつたので、日本人一般が口語に關する知識が貧しかつた。そこに鐵道が敷かれて交通が便利になり、標準語を話す機會が急に殖えたので、標準語の知識が急に需要される様になつた。方言矯正は、かういふ事情を背景として興つたのである。

明治三十五年四月には國語調査委員會が設立された。同年七月に公表された同會の調査方針中には、「方言ヲ調査シ標準語ヲ選定スルコト」といふ一項がある。同會はこの目的のために、明治三十六年九月、音韻取調に關するもの二十九項、口語法取調に關するもの三十八項を選んで、各府縣に調査を依頼した。その報告を整理したのが、音韻調査報告書、及音韻分布圖（明治三十八年三月）口語法調査報告書、及口語法分布圖（三十九年十二月）である。此調査會の活動が方言採集の興味を刺激した功は大きい。しかし、これを以て、明治の方言熱の勃興を説明できると考へるのは誤である。方言書の刊行は、調査會設立以前から既にあつた。まして、蒐集著手の時期が調査會以前に溯るものに至つては頗る多い。たとへば、「茨城方言集覽」は、三十七年四月の出版であるが、蒐集の始期は三十四年一月である。「大分縣方言類集」の出版は三十五年十二月であるが、著手の時期は三十四年三月である。「石川縣方言彙集」（三十四年十二月）の凡例に

彙ニ帝國大學文科大學ニ於テ全國ノ方言ヲ蒐集セラレシ際本縣ニ於テ縣下ヨリ其ノ材料ヲ徵シ金澤市ノ分ハ特ニ私立石川縣教育會及石川縣師範學校同窓會ニ委囑シテ調査セシメ斯塔テ全縣下ノ方言ヲ取纏メ之ヲ帝國大學ニ送付セラレタリ本書ハ其原稿ニ就キテ更ニ精査ノ上彙類編纂セシモノナリとある。これによれば、國語調査會よりも先に、帝國大學で全國の方言を蒐集した事があつたと見える。大川榮太郎氏によれば、明治三十年、東京帝國大學文科大學長外山正一博士の名によつて、各縣の知事に方言取調を依頼したといふ（方言と土俗、一の三）明治三十六年以前の方言集はこの影響と見てよからう。

明治三十七年には、國語調査委員會から「方言採集簿」が出た。これは保科孝一氏の擔任で、ガベレンツの「外國語採集簿」に據つたと序文にある通り、實質的には外國語採集簿に近いものである。本書の出版は少し遅かつた憶みがある。三十七年といへば、そろ／＼採集は下り坂であつた。國語調査會は更に市郡單位の精査を試みるために、明治四十一年三月、「音韻取調ニ關スル事項」四十一條、「口語法取調ニ關スル事項」九十條を印刷して、之を再び府縣に依頼した。この報告書九百通の整理成り既に印刷するばかりになつた時、大正十二年の震災災に逢ひ、報告書と原稿とを灰燼に歸してしまつたのは惜しい事である。

明治の末までは、毎年、相當の方言集が出たが、大正になると急に衰へ、一年に僅か一二冊を數へ

るに過ぎなくなつた。たゞ、この間に特筆すべき事が二つある。一つは、大正十二年に郡役所が廢止される事になつたので、郡制廢止紀念として、各地に郡誌の刊行が競うて行はれ、それには方言を載せたものゝ少なくない事である。明治の方言集は未だ三府四十三縣を網羅したとは言へなかつたから、郡誌の方言は、その足らざる所を補ふものとして價値がある。今一つは、「郷土研究」が第四卷一號（大正五年四月）から方言欄を設けた事である。これには、柳田さんが、色々の匿名を用ひて、毎號書いて居られた。東條さんが虹の方言や方言書目についてお書きになつたのも、この頃の「郷土研究」であつた。しかし、同誌は一年の後、四卷十二號を以て休刊となり、次いで興つた折口博士の「土俗と傳説」も僅か四號で廢刊となつたので、沈滞した方言研究を再興させるには至らずして止んだ。東條さんが方言資料の第一冊として、「南島方言資料」の初版をお出しになつたのは大正十二年八月の末であるが、頒布に先立って大震災に逢ひ、處女作と藏書の一切と國語調査會の報告書九百通と原稿の一切は火災にかゝり、十年の苦心は一瞬にして火の粉となつて飛び散つた。この大震災は方言研究に最後の止めを刺したかに見えた。

#### 第四節 昭和時代

昭和の方言學は、柳田さんを父とし、東條さんを母として、昭和二年に生まれたものである。東條さんの「大日本方言地圖」「國語の方言區劃」が出版されたのは昭和二年三月である。柳田さんの最初の方言論文「蝸牛考」が「人類學雜誌」四十二卷四號に出たのは同年四月である。この年の内に、柳田さんは、私生兒を意味する方言（民族、二ノ四）末子を意味する方言（同、二ノ六）産婆を意味する方言（同、三ノ一）農民史研究の一部（斯民、二二ノ六、七、八）小さき者の聲（信濃教育）民間聖事（近代風景、二ノ六、七、八）藁の方言など（地上樂園 民謡號）泉の啼聲（家の光、三ノ八）方言と昔（アサヒ・グラフ）などをお書きになり、翌年には、方言の小研究（民族、三ノ三）玉蜀黍と番椒（同、三ノ四）虎杖と土筆（同三ノ五）交易と贈答（同、三ノ二）蟲の名の方言（同、三ノ二）蟻螂考（土のいろ、四ノ四）等、方言に關する論文をお書きになつた。その題目の廣く、發表機關の多様なことは、共に驚くべきものがあるが、結果から見れば、「民族」の諸論文が一番社會的効果が大きかつた。それは、その後、方言採集家として現れた人々が、誰も彼も、「民族」の讀者、少なくとも土俗學者であつた事實に徴して明である。しかし、この影響が表面に現れるまでには、少なくとも丸三年の年月が必要であつた。昭和二年三年は問題にならず、昭和四年になつても、方言の單行本は僅七冊出ただけ。しかも、その内の三冊は大田榮太郎氏一人のものである。雜誌に載つたもの

も、二十人足らずが三十數篇を書いて居るだけである。何よりも、この頃は發表機關に恵まれなかつた。「民族」は既になく、毎號方言を掲載する雜誌といへば、「旅と傳説」と「岡山文化資料」とだけであつた。土俗雜誌も少なかつたが、國語雜誌に至つては一冊もなく、たゞ、國文學や國語教育の雜誌に寄生して居る状態であつた。當時の方言熱心家は、柳田國男、東條操、大田榮太郎、嶋村知彦、桂又三郎、本山桂川、佐藤清明、山本靖民、青柳秀夫、橋正一の諸氏であつた。

翌昭和五年になると、俄に赦えて、單行本だけでも、内地十七冊、琉球語三冊を數へた。殊に、この年刀江書院の「言語誌叢刊」が現はれ、前の年の末、大田榮太郎氏の「方言集覽稿」が發行された事は大きな喜であつた。「方言集覽稿」は昭和四年に、群馬、長野二縣を出し、五年には、福島、栃木、三重、福井、奈良、和歌山の六縣を出した。「言語誌叢刊」は、この年、蝸牛考(柳田氏)南島方言資料(東條氏)壹岐島方言集(山口氏)莊内語及譯釋(三矢氏)の四冊を同時に出した。日本最大の方言集である「八重山語彙」(宮良當壯氏)が出たのも此の年である。以上は單行本の話であるが、雜誌の方もこの年は大いに賑はつた。この年、最初の方言雜誌「方言と土俗」(橋正一編輯)が創刊された。「音聲の研究」「音聲學協會報」は早くからあつたが、この頃になつて、方言記事が急に多くなつた。嶋村さんは死んだが、この年は能田太郎、杉山正世二氏の活動が目立つた。杉山さんは「愛媛

縣周邊郡土俗研究會報」を創刊して、方言に紙面の半をさいた。九州放送局は九州方言講座を放送した。

昭和六年は方言熱が最高潮に達した年である。まづ學會について言へば、東京には前からあつたが、六年になつてからは、國學院大學方言研究會(國大内)、近畿國語方言學會(京大内)、廣島方言學會(廣島文理大内)の三つが殆ど時を同じうして生れた。この内、國學院のは「方言誌」を發行し、今日に至るまで最も多く活動して居る。次に雜誌について言へば、「越中方言研究叢報」(金森久二氏編輯)「方言」(澤野武馬氏編輯)「方言と國文學」(山下邦雄氏編輯)の三つがこの年の下半期に創刊された。加賀治雄氏編輯の「土の香」、本山桂川氏の「民俗研究」梅林新市氏の「土の色」も、此の頃、目立つて方言記事が多くなつた。次に單行本について言へば、四十三種、四十五冊を數へる。

この年の八月、東條さんの「簡約方言手帖」が出た。これより先、昭和三年、同じ人によつて「方言採集手帖」が作られたが、この方は語彙が多過ぎるといふ批評があつたので、この年になつて、語彙を精選した簡約版をお出しになつたのである。前著には、稻・粟・麥・杉といふ様に方言の全く無い言葉まで掲げてあつたが、新著に至つては、之等は省かれ、方言量の多い言葉だけにしたので、利用價値は一段と多くなり、數版を重ねた。

昭和七年は大體前の年の延長で、別に變つた所も無い。方言の單行本三十九種・四十三冊、之を色色の方面から統計に取つた結果、私は次の様な事實を發見して、之を發表した事がある。

- (一) 個人のもの多く、學校・教育會の編纂物は少なし(明治と正反對)
- (二) 研究そのものを目的とせるもの多く、方言矯正を目的とせるものは稀なり(明治と正反對)
- (三) 東北、中部、九州の地方多く、關東、近畿、四國は少し(明治も同様)
- (四) 一縣を對象とせるものは分布調査以外には少なく、一町村を對象としたるもの多し(明治と正反對)

反對)

- (五) 分布調査は、近年、勃興の兆あり。しかれども、今までの所、甚だしく盛なりとは言ひ難し。
- (六) 全國的比較はいまだ起らず。
- (七) 音韻語法は、雜誌上の論文には多けれども、單行本としては稀なり。
- (八) 五十頁以下の小冊子多し。
- (九) 地方出版物多し。
- (十) 非賣品、または、五十錢以下のもの多し。

以上の傾向は三年後の今日でも大體當てはまるが、たゞ、近頃は師範學校から出るものも多くな

と、二百頁以上のものと、叢書の名とを記して置くに止める。

叢書名

- 方言集覽稿 (大田榮太郎氏)
- 言語誌叢刊 (刀江書院)
- 方言言誌 (國學院大學方言研究會)
- 方言叢書 (岡山市、文獻書房)
- 方言資料 (盛岡市、一言社)
- 趣味叢書 (尾張起町、土俗趣味社)

全國的(方言手帖は除く)

- 國語調査會 口語法調査報告書、同分布圖
- 同 音韻調査報告書、同分布圖
- 農商務省 狩獵鳥類の方言

農林省農務局

鳥類の方言

農商務省

日本樹木名方言集

農林省山林局

樹種名方言集

靜岡縣警察部

全國方言集

東條操

大日本方言地圖、國語の方言區劃

柳田國男

山村語彙(正續)

同

産育習俗語彙

同

風位考

同

蝸牛考

吉澤義則

校本物類稱呼諸國方言索引

永田吉太郎

方言資料抄、助詞篇

同

地方語讀本

奥里將建

國語史の方言的研究

橋正一

諸國幼な言葉集

二百頁以上(昭和の分)

○秋田縣學務課

秋田方言

山口麻太郎

壹岐島方言集

若山甲藏

口向の言葉、全三卷

○大田榮太郎

和歌山縣方言

○福井師範學校

福井縣方言集

加賀治雄

尾張の方言、全二卷

小倉進平

仙臺方言音韻考、附續萩

上田中學校

信州上田附近方言集

○島根女子師範

島根縣に於ける方言の分布

桂又三郎

岡山動植物方言圖譜、全五卷

島原第一小學校

島原半島方言の研究

北山長雄

津輕語彙

○山形師範學校

山形縣方言集

○和歌山女子師範

和歌山縣方言

○廣島縣立師範

廣島縣方言の研究

○大分師範學校

大分縣方言考

池邊用太郎

熊本縣方言音韻語法

塚田芳太郎

千葉方言、山武郡篇

○愛知女子師範

愛知縣方言集

○瀬戸重次郎

岐阜縣方言集成

齋藤秀一

東京方言集

嶋村知章

岡山方言

土井八枝

土佐の方言

嶋戸貞良

鹿児島方言辭典

○兒玉卯一郎

福岡縣方言辭典

右の内、○印を附けたものは全縣的調査である。その編者は、縣學務課一、師範學校七、師範學校教諭二、其他一となつて居る。實際師範學校の生徒を利用するのでなければ全縣的の調査は困難であ

る。假に調査に成功したとしても出版する費用に困る。假に出版しても、儘つた購讀者を得る事が出来ぬ。以上の三點で師範學校は恵まれて居るわけである。師範學校の方言集は、明治四十四年に「靜岡縣方言辭典」が出て以來二十年間出なかつたが、昭和六年からは毎年二三冊づゝ出る様になつた。これは、方言流行のせいばかりでなく、文部省の郷土研究の奨励も與つて力があるだらう。この傾向は今後も続き、終には、方言辭典を出版しない師範學校は全國に一枚も無いといふまでになるだらう。明治の方言採集は教育會が中心であつたが、昭和のそれは個人と師範學校とが中心になつてゐる點が違ふ。出版の年月を見れば、師範學校の方が個人よりも一足遅れて居るが、それは計畫が大規模で、整理に手間が取れたからで、著手の時期を較べれば、あまり違つて居ない様である。

x

x

x

昭和を前期と後期とに分ける事には反對する人もあるかも知れないが、分量から見れば、昭和の一年間は、明治の十年間にも相當するので、二期に分ける事は不釣合ではない。昭和の方言學は、土俗學者から與つて、國語學者に移つたものである。その移行の時期は大體、「方言」の創刊當時と見てよい。もつとも兩期は續いて居るので、ハッキリした區別は立て難い。「方言」以前にも、「民族」に、橋本博士がロドリゲスの方言研究について紹介の筆を執り、小林英夫氏が同誌に言語地理學に

ついで、Dumort の説を紹介するなどの事はあつたが、「民族」は間もなく廢刊になつたので、その頃、言語學者・國語學者にして方言に興味を持つてゐる人があつたとしても、第一、發表の機關が無かつた。それが「方言」の創刊によつて、有力な發表の機關が與へられたので、俄然、活氣を得た次第であつた。服部四郎氏・吉町義雄氏・永田吉太郎氏の様な言語學者・國語學者が登場したのも此の頃である。服部さんはアクセントの全國的比較、永田さんは比較方言語法、吉町さんは九州方言史と九州方言語法といふ風に、それ／＼題目は違ふが、いづれも純然たる語學的で、從來土俗類の人々が主として單語に興味を持つてをツたのと較べて、興味の在り所が違ふ。もつとも「方言」以後も、土俗學者が方言から退いたのではない。今は、たゞ、中心の在り所の相違を説くまでである。「方言」創刊以後は、一般國語學界も頗る活氣を帯びる様になつた。「外來語研究」(棟垣賢氏等編輯)、「國語研究」(菊澤季生<sup>キキウ</sup>氏編輯)、「江戸時代語研究」(松川弘太郎氏編輯)、「文字と言語」(齋藤秀一氏編輯)、「言語」(小林淳夫氏編輯)等が相繼いで創刊され、「國語教育」は方言研究機關を設け、「國學院雜誌」も國語研究欄を設けるなど。殊に、明治書院の「國語科學講座」は、この種の講座としては最初のもので、特筆してよい。この講座には、方言關係では、東條・柳田・服部・吉町・江<sup>ツル</sup>・橋の六氏が執筆して居る。方言研究熱は隔々にまで及び、縣教育會雜誌や校友會雜誌にして、方言記事を掲げるもの、或は、方言の特輯號を出すものが續出した。